

第 23 回中之島映像劇場

光の布置—前田真二郎レトロスペクティブ—

主催：国立国際美術館

協賛：ダイキン工業現代美術振興財団

国立国際美術館地下 1 階講堂 参加無料・各プログラム入れ替え制 要事前予約（先着 50 名）

2022 年 11 月 12 日（土）

10:30- A プログラム*

13:30- B プログラム

15:10- C プログラム

17:40- D プログラム

2022 年 11 月 13 日（日）

11:00- E プログラム*

13:00- F プログラム

15:30- G プログラム 終了後・アフタートーク 前田真二郎

*冒頭に担当者による解説を行います。



《日々“hibi”AUG》

第 23 回中之島映像劇場では、映像作家・前田真二郎(1969 年生)のレトロスペクティブを開催します。前田は、1990 年代初頭にイメージフォーラム・フェスティバルの作品公募に入賞、その後、実験映像やドキュメンタリー、メディアアートの枠を横断する、パーソナルな映像表現の可能性を開拓していきました。また、他領域のアーティストとの共同制作、展覧会の企画にも携わり、映像レーベル SOL CHORD を立ち上げるなど、新たな作品の流通・発表方法も探求していきます。そして、2008 年から現在まで続いている「BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW」と「日々“hibi”AUG」のシリーズでは、一定のルールを設けるかたちで、映像による日常のドキュメントを制作・発表してきました。これらの作品は、国際映画祭などでも上映され、プロジェクトとして複数の展開をみせており、大きな注目を浴びています。

今回中之島映像劇場では、最初期のビデオアートから 2022 年夏に撮影された最新作まで、多方向へ散りばめられるように展開された前田の作品群の布置を浮かび上がらせます。「布置 (constellation)」は、特別なルール設定に基づき、撮影した映像や録音された声を再構成していく前田の制作方法にも重なるキーワードであり、目指すべき映像表現に通じる概念として作者が語っている言葉です。過去の記憶と現在、未来の予感を縫い合わせるその方法とイメージの力で、鑑賞者の思考と感覚を揺さぶってきた前田真二郎の軌跡に迫りたいと思います。

また、今回の特集上映のために作成された本配布資料には、前田のキャリアと映像作品、プロジェクトを再考するため、下記の方々に解説を寄せていただきました。山形国際ドキュメンタリー映画祭でプログラム・コーディネーターをつとめてこられた加藤初代氏には、即興映画としての「hibi」「BYT」シリーズの作品がもつ特質を探っていただき、鑑賞者の自由な受容や解釈を促す、その可能性について論じていただきました。大学院時代の前田の後輩であり、自身も映像インスタレーション作品などを発表する林ケイタ氏には、B プログラムで上映される初期作品を中心に、当時のビデオノイズによる表現と前田の師の一人である松本俊夫との関係などについて、貴重な証言を寄せていただきました。さらに IAMAS で前田に師事し、これまで「休日映画」シリーズなどを発表してきた映像作家の齋藤正和氏には、教育の現場で前田の仕事に接してきた視点も踏まえ、領域横断的なその作家活動を紐解くエッセイを寄せていただいております。そして、IAMAS の同僚でもある詩人の松井茂氏には、「BYT」シリーズにおける指示書の役割から、前田の作品を現在に至るアートヒストリー／アートシーンに接続する議論を展開していただきました。なお本上映会の企画者である国立国際美術館客員研究員の田中晋平も、上記の「布置」の概念を手がかりにして、前田の作品を読み解く一文を執筆しました。

32 年におよぶ前田真二郎の映像表現に迫る導きの糸として、本上映会および本配布資料が活用されることを願っております。

A プログラム

《日々“hibi” 13 full moons》(SD-digital / 2005年 / 96分)

366日間、月の運行に従って日々15秒のカットをカメラ付きパソコンで撮影した即興映画。「hibi」シリーズの最初の作品。

B プログラム

《20》(VHS-video / 1990年 / 5分)

ビデオテープに寿命があるのを知り、あえて最初から劣化した質感の映像を作り出した。前田が20歳の時のデビュー作。

《FORGET AND FORGIVE》(VHS-video / 1991年 / 14分)

3部構成によって、鑑賞者に記憶と忘却のプロセスを体感させる作品。「イメージフォーラム・フェスティバル1992」で受賞。

《VIDEO SWIMMER IN BLUE》(VHS-video / 1992年 / 12分)

当時のテレビに実装されたブルースクリーンモードを、砂嵐=ノイズを隠蔽する機能として捉えることから発想された叙事詩。

《TELEVISION BY VIDEO BY TELEVISION》(VHS-video / 1993年 / 5分)

テレビ番組終了後のサンドストームを素材に、ビデオ・フィードバックなどを活用することで、即興的に構成された映像作品。

《L》(Hi-8 video / 1995年 / 25分)

字幕で示された手紙とそれを読む人物らの映像を通し、言語とイメージの関係、記憶と忘却などの主題が展開されていく。

《Braille》(Hi-8 video / 1996年 / 11分)

19世紀フランスで、6つの点の組み合わせでアルファベットを表現した、点字発明者のルイ・ブライユを題材とした映像の実験。

C プログラム

《王様の子供》(DV、SD-digital → 16mm / 1998年 / 40分) 製作：愛知芸術文化センター

目を飾りて覆う子供たち、その複数の声が、コートピアと外部の世界について語る。愛知芸術文化センターオリジナル映像作品。

《オン》(DV、SD-digital / 2000年 / 72分)

隔てられた場所で生きる、言葉を発しない若者たちの日常が、鑑賞者の中で呼応するように重なり、映像世界を紡いでいく。

D / F プログラム

《日々“hibi” AUG》(FHD-digital / 2008-2022年 / 120分)

毎年8月、毎日15秒間の映像を撮影・構成した作品。2022年8月に撮影された映像は、今回の中之島映像劇場で初公開される。

E プログラム

《on2》(DV、SD-digital / 2003年 / 5分)

2000年に発表された《オン》のコンピューターを用いた自動編集によるリミックスバージョン。

《中也を想い、サンボする》(DV、SD-digital / 2006年 / 10分) 製作：山口情報芸術センター [YCAM]

中原中也の言葉をめぐるオムニバス企画のなかで、中也が遺した三篇の詩などからイメージネーションを広げていった。

《Wedding 結縁》(DV、SD-digital / 2007年 / 15分) 製作：佐野画廊

チベットの聖地であるチンパー渓谷で過ごした時間を映像化した作品。企画「7人の作家による映像」に参加して制作された。

《星座》(FHD-digital / 2009年 / 20分) 製作：佐野画廊

松本俊夫監修のオムニバス映画《見るということ》の一篇。三つの主題を設定し、撮影すべきものを見出しながら制作された。

《GOLDEN TIME》(FHD-8 digital / 2019年 / 8分)

9チャンネル、27時間分のテレビ放送を録画した素材から制作された未公開短編。今回の中之島映像劇場が初公開となる。

G プログラム

《BETWEEN YESTERDAY & TOMORROW 2008-2022》(FHD-digital / 2008-2022年 / 50分)

1日目に明日の目的地についての語りを録音、2日目に撮影を行い、3日目に出来事について報告をするルールに従い、2008年から制作され続けてきたシリーズ作品。

第 23 回中之島映像劇場
光の布置—前田真二郎レトロスペクティブ—配布資料をウェブに再掲
発行：国立国際美術館
資料発行日：2022 年 11 月 12 日